



研修の充実を図ろう！～令和の日本型学校教育～

今年の夏のセミナー研修では、のべ500名を超える先生方が受講されました。忙しい中、多くの先生方に参加していただき誠にありがとうございました。

皆さんもご存知の通り、教育公務員特例法及び教育免許法の一部を改正する法律が成立し、教員免許制度はこれまでの成果を継承しつつ、教師の個別最適・協働的な学びの充実を通じて主体的・対話的な深い学びを実現するため、新たな研修制度が実施されました。改正された法律には、研修履歴の記録と指導助言等が規定されています。今後、センター等の研修への参加者も増えることが予想されます。

しかし、研修会だけが研修ではありません。今、様々なことを通して学ぶことができます。教育雑誌やインターネットを通して学ぶことができますし、オンラインの大学の講義に参加することができます。大事なことは、教師の高度な専門職として新たな知識技能を習得していく意欲ではないでしょうか。ぜひ毎日の授業を大切にされ、令和の日本型学校教育の実現のために努力していきましょう。

校内授業研究会が各学校で実施されています

10月となり、今年度も半分を過ぎました。各学校では、校内授業研究会が計画的に実施されています。教育研修センターからも指導主事が参観させていただいていますが、事後研究会で先生方が熱心に子ども達の学びについて話されている様子を見て、とても感動しました。

ところで、佐藤学氏がブックレット「学校を改革する～学びの共同体の構想と実践」の中で以下のようなことを書いています。

「教師の成長には二つの側面がある。職人としての成長と、専門家としての成長である。この二つの成長において、校内における教師の学びの共同体の構築は重要である。職人としての成長は「技法」と「スタイル」の獲得であり、その方法は「模倣」にある。それに対して専門家としての成長は、「実践と理論の統合」にあり、その方法はケースメソッド（事例研究＝授業研究）にある。

これまで日本の学校では、年に3回程度の授業研究を行い、その成果を冊子にまとめる研修活動を行ってきた。しかし、年3回程度の研究授業によって授業が変わることがないし、学校改革が遂行されることもない。そもそも成果としてまとめられる冊子は誰にも読まれない。「やったつもりになる」あるいは「やったことにする」校内研修ならば、やっても効果は乏しい。

（中略）

「一人でも教室を閉ざしている教師がいる限り、学校を改革するのは不可能である。すべての教師が授業を公開し、一人残らず教師が相互に学び合う関係が築かれてこそ、学校改革は実りある成果をあげることができる。そして、教師の研究の成果は冊子にあるのではなく、教室における子どもの学びの事実にある。教室の子どもの学びの事実の創造に挑戦し合い、その事実を観察し合って、その事実から学び合うことが何よりも重要なのである。」



「コトバ主義教育」から抜け出ること その3 《コラム No.14》

前回の4Hクイズ、いかがでしたか。教育・学びに重要な4つのH。Humanity《人間性》、Honesty《誠実さ》に続く三つ目。それはHumility《謙虚さ》です。よく教える人はよく学ぶ人であり謙虚です。

「子どもが学ぶ授業」をつくる教師は例外なく謙虚ですし、研究会でも指摘や批判をするより「私が学んだこと」として確か深い見識を感じさせる発言をします。何より子どもに対して謙虚です。

では4番目は? それはHumour《ユーモア》です。何かを理解し納得し自分のものにした時、そして仲間と深く了解しあっている時、確かさが余裕となって良質なユーモアが生まれます。富士市の元吉原中学校は校長先生がユーモアを大切にする人で、校内研も笑いにあふれながら、でも気がつく子どもたちの姿や教師のあり方についてとても大切な話しをしている、そんな研究会でした。

この4つのHはアメリカの教育研究者が来日して学びの共同体の大会で講演したことなのですが、この講演を聞いた元吉原中の山田教頭先生は、同僚の先生方の前で「よし明日から鉛筆は4Hだ!」と呟きました。みな大笑いしましたが、真面目に「本校も4Hを大切にしよう」などと言われるより、よほど心に沁みたのではないのでしょうか。

先日、市内の中学校で、このHumility《謙虚さ》とHumour《ユーモア》のある校内研に出会いました。N中学校、谷井アドバイザー訪問時の体育の授業の校内研。種目はバレーボール。パスをつなぐことに重点を置き、全員がボールにさわるとそれも1点になるというルールで対抗形式で授業が進みます。クラスで体育が一番苦手、特に球技はボールを避けるだけでほとんど参加できなかった生徒が、みんなの支えと声かけでやがて積極的に参加し、中盤にはボールに向かって構えるようになり、最後はダイレクトに返して点をとり拍手されるドラマもありました。

校内研は、先生方が生徒の姿をユーモアを交えて温かく語り合い、共感し合う和やかな場となりました。その子を支える生徒たちの姿を謙虚に温かく讃える教師たち。ある先生は、その苦手だった生徒が同じチームにいたバレー部のキャプテンの打ち損じたボールをアシストする姿を紹介してください。別の先生は「ボールをつなぐことは実は心をつなぐこと」と発言されて、まるで佐藤学さんの「リレーはバトンをつなぐのではない、速さをつなぐ」を聴くような思いがする場面もありました。生徒に対して謙虚、互いに謙虚、学びに対して謙虚、謙虚であるから学びが深まる、それを実感させてくれる校内研でした。

紙数が来てしまいました。前回のもう一つの問い。引き算を足し算に変えて回答した女の子の理由については、次回にお話ししましょう。みなさま、それまでお元気で。

適応指導「すこやか教室」から

現在、不登校児童生徒のための教室である「すこやか教室」には、毎日10数名の子ども達が通ってきています。最近、小学生が増えており、時に20名を超える日もあります。

「すこやか教室」は社会的自立を目指しており、学習ばかりではなく、スポーツ教室やミニコンサート、工作教室等も行っています。スポーツ教室は月に2、3回、アリーナや中央体育館を使ってバドミントンや卓球を行っています。また、工作活動については、1学期には「苔テラリウム作り」を行いました。子ども達は自分なりに工夫し、楽しみながらテラリウムを作っていました。子ども達が少しでも笑顔になり前向きに生活できるように活動できる場面を多く設定するようにしています。またカードゲームなどを行うことで、子ども達が交流し、コミュニケーション能力が身につくようにしています。

また学習面では、子ども達が自分で計画をたて、学習プリントやワークブックなどに取り組んでいます。年に数回ですが、ALTによる英語活動や理科教諭による実験なども行っています。

「すこやか教室」は、貸し出し用のタブレットがあるので、在籍校の協力を得て、オンラインで授業を受けることができます。学校に復帰する子どもも増えています。すこやか教室の見学は、いつでもできますので、ぜひご相談ください。



オンライン授業



苔テラリウム作り



ミニコンサート